

第1部

公開研究会「民具の文化資源化—“モノ”研究の新たな挑戦—」総括

小川 直之

「“モノ”語り—民具・物質文化からみる人類文化」と題して開催された国際シンポジウムの1日目は、神奈川大学国際常民文化研究機構が2009年度から実施している8つのプロジェクト研究のうち、「民具の名称に関する基礎的研究」（代表：神野善治）、「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」（代表：角南聡一郎）、「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」（代表：後藤明）の公開研究会が行われた。それぞれのプロジェクト研究は、発足以後プロジェクトごとに研究会や資料調査などを行ってきており、今回はその研究会を連結、共同して「民具の文化資源化—“モノ”研究の新たな挑戦—」という課題に迫ろうという試みである。今回の公開研究会に加わった3プロジェクトは、その研究が民具・物質文化あるいはこれを巡る技術伝承を対象としており、異なる視点からの研究プロジェクトの成果を互いに公開しあい、共通する課題について議論を深めようという企画である。共同研究拠点として、並行して複数のプロジェクト研究を進める組織ならではの企画で、拠点形成の方法として高く評価できる。つまり、外部研究者を中心に組織されているプロジェクト研究は、ともすれば縦割りのになり、国際常民文化研究機構としての理念がぼやける危険性を常にはらんでいる。この問題を乗り越える仕組みとして、共同のプロジェクト研究を、さらに共通的に存在する課題によって共同させるといふ、二重の共同化を仕掛けることで機構設置理念の具現化をはかろうという意図であろう。

公開研究会は前述の3つの研究プロジェクトがそれぞれセッションとして分担する形で進められた。セッションⅠは「民具の名称に関する基礎的研究」から「民具名称の諸問題」という課題が提示され、代表による趣旨説明に続き、3名の発表があった。それぞれの発表内容の概要は本誌にあるとおりで、河野通明発表は民具の広域比較、国際比較研究のための検索用語となる標準名について検討するもので、歴史的な視点を明確にしながらか、とくに耕起具の犁をその利用法と形状から分類し、名称を与えていく手続きには説得力があった。佐々木長生発表は、福島県只見町の民具を例として在地における民具名称の与え方、つまり地方名の命名法を整理する試み。川野和昭発表は、ラオス北部地域と鹿児島県を中心とする南九州地域における背負い籠、魚籠、巻棒、箕について、それぞれ在地でどこに重点を置いて名づけられているかを読み解く発表であった。

民具名称をめぐる問題は、河野の言うように比較研究のための検索用語として、標準的名称をどのように与えるのが課題となる。つまりこの作業は民具分類の研究を前提として有効なシソーラスを構築し、このシソーラスを用いて国境を超えた広域比較を行おうというのが狙いとなる。これに対して佐々木や川野のケーススタディは、在地においてモノに対する視点がどこにあるのかを地域名称から解析しようという提案で、民具名称をめぐる問題には、少なくともこれら2つの課題の存在が明らかになった。しかしこのプロジェクト研究が、民具名称に関する諸問題の析出に目的を置くなら、こうした研究成果の累積を成果とできるが、神野の趣旨説明にあったように標準名称案を提示することが目的ならば、その目的についての再検討が必要になる。それぞれの発表は内容が具体的でさまざまな示唆を与えてくれたが、それは研究課題に対する微分的な研究で、各研究をどのように積分していくのが今後の課題となるからである。

人類が自分の身体の延長にどのような道具を形成してきたのか、その総体を捉えるためならば、いわ

ゆる「民具」という枠組みだけではなく、もっと広く物質文化を対象としたデータベース化を考える必要がある。そして、そのモノの検索には1000から1500の自然言語をメタデータで与えれば、コンピュータによる検索の精度は現在より飛躍的に確かなものとなる。しかしこの場合には、物質文化に関するシソーラス構築は、検索ではなく、別の目的をもつことになろう。標準名称は、民具研究者相互の共通言語として必要だというのはわかるが、それでは特定分野の術語に留まってしまう。さらに問題なのは、日本語は表意文字と表音文字を組み合わせる言語で、それは世界のなかでは極めて特殊な言語である。こうした特殊性をもつ言語で国際的な標準名称が設定できるのかという疑問がでてくる。また、表意文字である漢字は、同じ文字がアジアの漢字文化圏でも異なる意味をもつ、つまり同じ表記でも指し示すのが別のものである場合があり、こうした問題をどのように乗り越えるのかも今後の課題となる。

民具名称の問題として提示されたもう一つの地域名称の具体相については、今回の発表ではあまり意識されていなかったようにも思うが、ここには、それぞれの地域名の命名法には人間とモノとの関係性が示されていることが明らかにされた。そのケーススタディは、人文学からのローカリズム構築に重要な意味をもち、こうした地域名称の徹底した集積は、その伝承が衰退し、途絶しようとしている現在、もっとも喫緊の課題といえよう。高度経済成長と市場原理主義の横行という歴史過程においては、文化や制度のグローバルスタンダード化に力点があったが、これでは新たな文化創造やここでいうところの「民具の文化資源化」は行い得ないことは明白であるからである。

セッションⅡは「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」から「民具からみる東アジアの比較文化史」という課題が提示され、プロジェクト研究の角南代表から「東アジアの民具・物質文化の通時的比較検討を通じ、共時性や差異をモノから読み取り、その背景に迫ることを目的とする」という趣旨説明が行われた。続いて楨林啓介発表では、考古学の立場から中国の食文化史を、これにかかるモノから検討して中国大陸における文化領域の史的変遷を明確し、こうした作業から中国文化の基層性と地域差が検討された。小熊誠発表は、沖縄県における亀甲墓形成の歴史的経緯と現状、そしてその形状や墓と埋葬者の関係性などの特徴を明らかにし、その上で中国福建省を中心とする南中国の墓を比較するものであった。沖縄県の亀甲墓は南中国からの影響があるのは明らかだが、墓と埋葬者の関係性や死生観、先祖祭祀のあり方は両地域でまったく異なり、こうした墓の社会性が亀甲墓の形状に反映されているという指摘は重要だった。朽木量発表は、石垣島の名産を例にして農地の基盤整備（圃場改良）と農業機械化という変化のなかで、従前からの農具がどのように継承されているのかを具体的に明らかにするものであった。

いうまでもなくアジア大陸の東の海洋に南北に連なる日本列島や琉球列島は、中国の中原思想からいえば辺境といえよう。それは歴史過程で与えられた「東夷」という表現からも明らかで、日本列島から琉球列島にかけての地域は、その辺境性に文化的な特質があるともいえよう。その辺境性というのは文化が持つ複合性にほかならない。こうした複合性は、セッションⅠの河野発表にあった日・中・韓における犁の比較研究からも明らかである。

セッションⅡの「民具からみる東アジアの比較文化史」という課題は、ここで指摘するまでもなく、前提となるやっかいな問題がいくつも存在している。東アジアという領域を設定する必然性がどこにあるのか、また、「比較文化史」という課題は何をどのように比較するのか、その時代はどこに軸足を置くのか等などである。文化の比較研究ではなく、「比較文化史」というのであり、文化史の比較ということになる。文化の歴史的な推移、変遷・変容などを東アジアの地域ごとにユニットとして捉え、それを比較しようということであると思われる。一般的には比較文化研究といえ、小熊発表のように特定の事物を中心にして比較し、事物そのものやその背後の文化史を有機的に捉えながら対比していくという手

法であろう。ここから何が見えてくるのかというのが研究課題で、その累積が研究進展につながる。しかし、今回の発表では、楨林発表は中国の基層文化と地域差、朽木発表は名蔵における台湾との交渉とその後の名蔵農業の変化と農具継承を主題としており、小熊発表のような文化の比較研究ではない。いわば東アジアの文化史の諸相について民具を視点として描くための前提というのが、2発表の内容であった。このセッションがいう従来の一般的な文化比較ではないという課題は、ここに新たな研究の可能性が秘められているが、「比較文化史」から全体としてどのような、しかも現実的なロジックを描けるのが今後の研究で期待される場所である。「東アジア」というエリアについても、かつて日本がもった「東亜」さらに「大東亜」という思想ではないことはわかっているが、ここにも民具や物質文化研究上の「東アジア」とはどのような論理をもつのか、問われる場所である。

セッションⅢは「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」から、今回は「フネとカラダ—フネの構造と漕法—」が取り上げられた。公開研究会の課題は絞り込まれ、プロジェクト代表の後藤明による趣旨説明に続き、赤羽正春発表のアムール川のフネと操船具、板井英伸発表のトカラから八重山地方の手櫂（パドル）による操船と儀礼、昆政明発表の絵画資料に描かれた操船具と操船法というように、研究対象とする地域と資料を換えて各々実態が示され、しかも共通的な操船具などについての比較検討も行われた。ここで言う操船具は、櫂や櫓など人間の身体の延長線上にある用具で、いうまでもなくこうしたモノの研究には、その用具や技術についてこれを保持し、駆使する人たちがどのように評価、表現するかというイーミックな問題と、流体力学などの科学技術面などからどのように評価するかというエティックな問題が内包されている。この問題に対しては、船大工でありカヤッカーでもある洲澤育範や映像作家の門田修が議論に加わることで、両面からの議論が行われたのは大きな成果といえよう。

筆者や発表者の昆、議論に加わった門田は、1980年代に行われていた和船研究会に加わっていたが、この研究会には舟才船や造船工学の研究者、船大工などさまざまな分野の研究者や実務者が参加していた。特に出版物を残すことなく終わっているのが残念で、それだけにこのプロジェクト研究の成果を期待したい。

木造による、日本でいえば「和船」は日本のみならずグローバルにその製造と利用が衰退している。こうした現実のなかで、木造船とこれをめぐる文化研究は、人類文化史を理解するためには必須の、しかも緊急を要する課題といえよう。とくに日本は海に囲まれ、列島間の移動には船は欠くことができない。しかし、従来、多様な船の存在やその操船具と操船技術は、必ずしも大きな課題にはなっていなかった。このプロジェクト研究の役割は重要といえるのであり、さらにこの研究からは身体技法がもつ身体の文化性理解、また板井発表で紹介された沖縄におけるパドルの儀礼は、今後の民具研究に新たな問題を提示したといえる。ハーリーなどの船競漕においてパドルをかかげる儀礼が存在するという指摘で、これはたとえばまったく異なる場面だが、愛知県の奥三河地方に伝えられている「花祭り」において、舞のはじめの方に行われる「バチの舞」が思い起こされる。太鼓を叩くバチを持っての舞であり、これを舞うことがその後の舞の、太鼓に抛る囃子の前提となっている。船とパドルの関係は太鼓とバチと同位の関係性をもつのであり、こうした視点による道具の儀礼研究を、板井発表が気づかせてくれた。

すでに予定の紙数は超えているが、最後に公開研究会の全体に言及しておく、今回の公開研究は第1には、個々のプロジェクト研究が焦点を絞って問題解決的に進めようとしているものと、課題がもつ多様な問題を発見すること、よく言えば意識的に従来の研究枠組みを拡大しようとしているものの、2つの方向性が存在することを明確にしてくれた。共同研究は年限を限ったのものであり、こうしたプロジェクト研究の方向性があることを認識して進める必要がある。ただし、その方向性と成果とは別物で、どのような成果があがるかは、人文学では事前に予測できるものではなく、研究を共同することで予測しなかった成果がでることを期待したい。外部資金による研究は、その計画段階から予定調和的と

もいえる成果予測が求められるが、実はこれでは斬新的な研究は難しいことはいうまでもない。事前に求められるのは、上記のような方向性の認識とメンバーの共通理解である。

第2には、それぞれのプロジェクトが基本的には独自のフィールドワークに基づいた研究発表を行ったことである。人類文化研究における実地研究の有効性、それは在地文化の細部を明らかにすることと、その記録の重要性が改めて明らかになったことである。日本における組織的な実地研究は1910年代後半から始まるが、その後約100年経った現在においても、気付かずにきた諸問題が実地研究によって認識されるのである。

そして第3には、今回の公開研究会は「民具の文化資源化—“モノ”研究の新たな挑戦—」と銘打って開催された。その方法ははじめに述べたように高く評価されるが、「文化資源化」という課題設定が適切であったどうかは、疑問がのこることである。今回取りあげられたモノやコトの学術資料化とか人類文化研究の資料化を「文化資源化」というなら、まさにその通りであるが、「文化資源」という場合は別の意味を持つのではなかろうか。民具は、その名の通り「民」の「具」で、こうしたものを研究対象とする文化研究が広く認識されていないことに対するレトリックというならわかるが、少なくとも日本の民具研究は、すでにこうした段階や位置づけではないはずである。むしろ発表内容からいうなら、民具研究におけるローカリズムの再構築とその比較研究というような内容だったとまとめておきたい。

午前10時から午後6時までの長時間にわたる公開研究会であり、個別的には多くの成果があった。しかし、はじめに述べた二重の共同性を持たせることでの機構設置理念の具現化を意図することから言えば、全体テーマに関する各プロジェクト研究からのアプローチと提言が必要だったように思う。

今後とも、より充実した成果をあげるプログラムであって欲しいことを願いつつ、思うがままを記させていただいた。総括という身に余る役割が与えられ、研究発表を適確に聞き取るように努めたつもりであるが、思い違いをしているところもあるのではないかと思う。こうした点がある場合にはご容赦願いたい。